



TITLE:

水龍會の誕生

AUTHOR(S):

高嶋, 航

CITATION:

高嶋, 航. 水龍會の誕生. 東洋史研究 1997, 56(2): 235-273

ISSUE DATE:

1997-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155136>

RIGHT:

水龍會の誕生

高 嶋 航

はじめに

第一章 清代消防の概況と展開

第一節 官辦消防

第二節 民辦消防

第三節 官辦消防から民辦消防へ

第二章 水龍の普及と言説の展開

おわりに

は じ め に

中國では火神のことを祝融という。「祝融」はまた火災をも意味するが、それが完全なメタファーになっていないところ(1)に中國における「火災」觀の特徴があった。火災は他の災害、例えば水害、旱害、蝗害などに比べてその原因における人的要素が高い。火災處理の責任を持つはずの統治者の側でも天災か人災かを決めかねていた。康熙一八年一二月太和殿の火災は不用心が原因であったにも関わらず「上天致警」としてとらえられた。康熙帝は懋勤殿で内閣大學士らに幼い頃から今に至るまで自分が天下萬民のために如何に刻苦精勵してきたかを述べ、「たとえ政治に宜を失するところがあっても、みな朕自身の咎であり、過失を臣下に押しつけるようなことは決してしない」とし、自らの拳拳たる意を表明する諭

を下した。⁽²⁾光緒一四年一二月貞度門の火災も「示警」として理解され光緒帝の修省を促したが、その一方で值班の章京・護軍らを看守怠慢で處罰している。⁽³⁾帝國中樞における火災に對する曖昧な態度は西太后の「(このたびの火災は)もともと典守の不愼によるものだが、(天からの)戒めである」と知り、修省をまず先にしなければならぬ」という言葉に顯著にあらわれている。⁽⁴⁾この態度は地方において火災處理の責任を持つはずの官吏にも共有されていた。康熙初の陳司貞は「民家の失火はもともと天災に屬する」といい、康熙末の戴兆佳は「(二度の火災は)天災とは言つても實は人事の不修による」⁽⁵⁾「(火災で大きな被害が出たのは)爾ら人民の人事の不修によるのか、それとも本縣(戴兆佳)が不徳なため風の向きを變えて火を追い返し天災を除くことができなかったためだろうか」というように天災と人災の間で搖れている。⁽⁶⁾火災頻發の原因を分野説や風水に結びつける者もいれば、人家が密集し、その多くが易燃物でできていることに歸する者もいた。⁽⁷⁾こうした火災に對する責任所在の曖昧さが消防の發達を遅らせたことは否めない。⁽⁸⁾消防は官が積極的に関与すべき問題とはされず、民間で行われた消防は「義舉」「善舉」の範疇とされていた。⁽⁹⁾火災自體、依然呪術的世界の中に取込まれていた。⁽¹⁰⁾『紅樓夢』第三九回、燃えさかる火を見た賈母は念佛を唱え火神に焼香するほか爲すすべを知らなかった。⁽¹¹⁾同治頃の上海果育堂の救火章程には消防ポンプによる消火法を述べた後、卯と呪言を用いた被火法を解説している。⁽¹²⁾天津の水會では消防ポンプの出動前に火神を拜して香を進めた。⁽¹³⁾これらを「迷信」「前近代」と決めつけるならば、清代における消防の實態を把握することはできない。

では今日我々が「消防」と呼ぶものを清代の人々はどうのようにとらえていたのだろうか。本稿ではいくつかの分析概念を用いてこの問題を検討したい。一つは方法上の區分、「破壊消火」「用水消火」である。⁽¹⁴⁾破壊消火用の器具には鐵錨(梁や柱にひっかけて建物を倒す)、火鉤(竈口)、鐵斧(建物を切り倒す)、麻索(建物を引っ張って倒す)などがある。また麻搭(泥水をつけて家や物に泥を塗り込んだり、水に浸して火勢をくい止める)は嚴密に言えば用水消火の器具であるが、火事を消し止めると言うよりは破壊消火での補助として用いられることから破壊消火の器具に分類しておく。用水消火用の器具には

水桶、水銃（水鐵砲）、水龍（ポンプ）などがある。水桶や水銃による消火は補助的な意味しか持たず、小規模火災の初期消火の場合を除いてこれらだけで火を消すことはできなかった。清末では水桶は多く水龍に水を供給するのに使われた。しかし水龍の性能も決して優れたものではなく、火勢が強まるとどうすることもできなかった。⁽¹⁵⁾

以上、「破壊消火」と「用水消火」は技術的側面に注目した分類であり、両者はその使用器具により容易に識別できる。⁽¹⁶⁾ もう一つの重要な区分は組織面に焦点を置いたもので、官が行う「官辦消防」と民間による「民辦消防」である。以下、第一章では上述の指標を用いて清代の消防を概観する。その中で官辦から民辦へという大きな流れが明らかになるが、第二章ではこうした變化が技術や言説とどう關わるのかを考えてみたい。

第一章 清代消防の概況と展開

第一節 官辦消防

黃六鴻『福惠全書』「防救失火」は康熙年間（1662-1722）の地方政府における消防のあり方を示す史料である。そこでは火事への備えがまず強調され、地方官は人口密度の高い都市やその近郊ではとくに注意を拂うべきだとし、保正・甲長は水桶、麻搭、火鉤、竹梯などを用意しておき、いざ火事となれば伍壯を速やかに集めることとされる。近郷の人々は麻搭で火を覆い消し、力のあるものは水桶で火に水をかけた。敏捷な伍壯には梯子に登らせ火鉤で建物を引き倒して火路を断たせた。保正はさらに搶火（火事場泥棒）にも注意を拂った。消防の組織がなく近郷の人々や居合わせた人々が行うその場限りの消防を「驅けつけ消防」と呼ぼう。⁽¹⁷⁾ 驅けつけ消防で行われたのは主に用水消火である。例えば嘉慶二四年一〇月文穎館の火災では、煤爐の火が壁を隔てて書櫃の廢紙に燃え移った時、失火者の李海元はまず水をかけて火を消そうとしたが消し止めることができず、屋外に出て火事を知らせた。叫びを聞いて驅けつけた方（功）と王幗碌もまた水をかけて火を消そう

としたが、火は折からの風にあおられて勢いを増し、どうすることもできなくなった。⁽¹⁸⁾ こうした駆けつけ消防は民辦消防が盛んとなってからも小規模な火災や初期消火において行われ続けたが、⁽¹⁹⁾ 器具・訓練・知識に缺けるため大規模な火災に對處できなかった。駆けつけ消防を組織と見ることはできないが、『福惠全書』の場合、保甲制という官側の回路を通して行われ、地方官の留意すべきこととしてとらえられていた點から特に「保甲駆けつけ型」として官辦消防に分類しておく。

地方官は火災が起けると眞つ先に現場に赴いて指揮を執ることになっていた。雍正帝は水桶、水銃、鉤鑷、麻搭を省城の各衙門に備えておくこと、火事の際には文武各官が人役・兵丁をひきつれて消火に向かうこと、搶火者を調べて捕まえること、延焼の多い場合は地方官を罰することなど、各省の督撫に消防の整備を求めている。⁽²⁰⁾ 地方の記録を見ると、南京では康熙初に江蘇按察使が上元・江寧の兩知縣と捕官を率いて搶火の取り締まりにあたった。⁽²¹⁾ 乾隆三十一年の重慶の火災では川東道臺が知縣らを率いて消火を指揮した。道臺は手をこまねいて進もうとしない人役を大聲で驅り立てて消火に成功している。⁽²²⁾ このように地方官が兵丁を率いて消火にあたる消防も先の保甲駆けつけ型と同じく臨時的なものである。ここでは前者と區別するために「兵丁駆けつけ型」と呼んでおこう。南京や重慶のように消防に熱心な地方官がいれば問題ないのだが、多くの場合この規定は空文化していた。⁽²³⁾ しかし一部には官が消防専門の組織を設置して消火に當たる都市もあった。後者を嚴密な意味での官辦消防とし、以下杭州、長沙、北京、成都の事例をみていこう。

杭州では清初に總督の劉が城守營の兵丁のうち強壯で敏捷なものを四〇名選んで救火兵丁とし、都司の指揮下においた。救火具は火鉤、火索、鏡鉤、麻搭、短梯、鐵鋸などで、破壞消火を主とした消防であった。兵丁のうち技能に優ればしは功績を納めたものは百總に昇進させ、火事場に行かなかったり五〇軒以上延焼させたものは罰せられることになっていた。乾隆一七年の浙江布政使葉存仁・按察使同德による「救火事宜」では、歲暮年節に花火や爆竹を使うことが多いのでその取り扱いに注意を呼びかける一方、刷黃箔鋪や點心店など火をあつかう職業に對しては、水缸を備え火の回りの

掃除を行うよう勸告しているが、「但し事は民業に屬するので禁止するのは難しい」と述べるようにあくまで勸告するに止まった。⁽²⁴⁾このほか従来の救火兵丁の問題点を指摘し、その改善が試みられた。消防の際の最大の問題は搶火・放火であった。當時救火兵丁と別に橋埧脚夫（かごかき人夫）で組織された「救火人役」があった。救火事宜と同時に定められた「嚴禁查拿搶火放火各事宜」によれば盗みをはたらくものの一〇中八、九は「機坊染坊錫箔工匠及橋埧脚夫」であったというから、兩者の母體は共通していたのである。救火兵丁もまたこれら惡徒と組んで盗みをはたらいだ。さらに搶火を容易にしたのが火事場の混亂であつた。そこで各官がつれていく人員を削減すること、關係者以外立ち入らせないこと、火事場の監視を強化することなどの對策をとつた。また搶火には外來の乞丐が參加していたことから、彼らに住む場を提供し、夜間に外出させないようにし、放火に對しては夜間の巡回を徹底するようにした。⁽²⁵⁾乾隆二四年には被災者の賑卹に關する章程も定められた。⁽²⁶⁾光緒二五年四月二十四日、按察使世杰が仁和・錢塘兩縣に出した照會文では杭州で火災の被害が大きくなるのは住居が密集しているのに風火牆が整備されていないからだとする。⁽²⁷⁾また消火は「火路を斷つことを以て第一の要義と爲」すが、住民の抵抗が大きいため、救火官兵に破壊された家屋への補償を定めることとし、これを紳董に相談させるよう兩縣に照會した。杭州三善堂の紳士は五月四日にこの通知を受け、一六日に按察使と兩縣に返答した。官署の洋龍（洋式ポンプ）は數が限られており、民辦の救災義集と協力して行わねばならないとまず用水消火に言及しながら、火路を斷つのは「救災至要の舉」と位置づける。しかし實際には民辦の消防隊が火災現場に行っても官吏が破壊を監督するか家主が破壊を申し出ない限り人夫は破壊消火を實行できない、と民辦による消防の限界を訴える。障火公牆（風火牆）についても官吏が被災後、早急に對應しないと實行は難しいとする。さらに官と民の消防隊が取水口をめぐる火事をそっちのけで喧嘩をし、「義舉が轉じて惡習と成」っているのを解決するよう求めた。⁽²⁸⁾六月二日、布政使・按察使連名の曉諭において、被破壊家屋の補償と破壊を拒む家主の處罰が決められ、こうしてようやく破壊消火實行の土臺が整備された。⁽²⁹⁾

『湖南省例成案』には雍正七年から乾隆三八年にわたる消防に關する一連の文書が收められている。すでに雍正一二年

には永興縣知縣侯國正が養廉三〇餘金をもって水銃（水龍）を購入し各所に火鉤、麻搭を備えていた。乾隆元年二月一日巡撫の高其倬は幼時四川で提督岳昇龍が行った消防を賞賛し、風下で火路を斷つ破壊消火を救火の唯一の法にあげ、各地に火鉤、鐵錘などを備えることの是非を布政使張燦に報告するよう命じた。⁽³⁰⁾乾隆八年二月七日巡撫蔣溥は布政使長柱に救火に關する條例を妥議するよう命じた。その中で江浙は火災が多く、救火具としては翻車、水櫃などがあるが、最善は家屋を破壊して火路を斷つこととする。二月一六日按察使明德と連名で提出された規條でも翻車、水銃は一臺三、四〇金もかかり、州縣の民人もまだこれを使いこなすことができないので、すでにあるところは修理して教習を待ち、ないところはしばらくそのままにして、まず大斧、火鉤などを整備するよう定めている。その他、杭州の例に倣って民壯から膽力のあるものを選び救火人役を設けること、居民が家屋を破壊されるのを願わないので賑卹を行うこと、搶火を取り締まることなどが定められた。⁽³¹⁾乾隆二〇年一〇月一四日巡撫陳宏謀は救火が名ばかりで實效を伴っていないことから救火の見直しを求めた。一月六日布政使楊廷璋・按察使夔舒は連名で救火規條を提出した。救火にはまず器具が必要だとし、救火具として水銃、水桶、鉤鏟、麻搭、翻車、大斧、火鉤、損繩、鐵錨、水瓢を擧げ、これら救火具は各市鎮村莊で整備分貯すべきだとする。第七條では「救火の要は先ず火路を斷つこと」と破壊消火の重要性を説き、水銃については火を防ぎ止めるにはこれに勝るものはないが、大きく重たいので擠筒（水鐵砲）の方が敏捷で好いとして、擠筒を導入することになった。このほか搶火の取り締まり、破壊された家への補償、官衙、特に監獄や倉庫の警備などを定めている。陳宏謀は批において乾隆八年の救火各條が今や「畫餅」になっていることから、このたびの規條も空談無益に終わらせまいよう指示した。⁽³²⁾乾隆二八年の一連の文書では長沙城内の四臺の水龍（水龍）が久しく壞れたままであることと消火に役立たないことからこれ以上水龍を作らないよう求め、また撫標左右兩營では麻搭が役に立たず整備されていないことが報告されている。⁽³³⁾乾隆三三年には撫標中軍郭錦が救火事宜を上申している。乾隆三八年には長沙・善化各縣に一臺づつの水銃がおかれ、⁽³⁴⁾嘉慶二三年には撫標參將衙門に二臺の水銃がおかれていた。⁽³⁵⁾しかし湖南省を通じてわずか二臺の水銃しかなかったと

いうことは、消防が實質破壊消火であったことを示す。

北京の紫禁城では康熙年間に東華門・西華門外に防火歩軍が設置され、雍正元年には火班が設けられた。⁽³⁶⁾ 雍正五年には城内にも百名からなる火班がおかれた。乾隆元年に火班は壽康宮西牆外に移されたが、乾隆二六年九月にその壽康宮で火災があった。城外の護軍巡更がこれに気づき、急いで開門するように叫んだ。火班の責任者である總管首領太監らが驚いて目を覺まし門を開けずに自ら火事を消し止めた。乾隆帝はたまたま小規模の火事だから消し止められたものの大きな火事だっただろうするのか、と開門しなかったことを責め、「失火の罪があるばかりか開門しなかった罪は更に大きい」として太監らの處罰を命じた。⁽³⁷⁾ 嘉慶二年の火災は太上皇帝であった父の敕諭により寛大な措置がとられたものの、⁽³⁸⁾ その後嘉慶帝は賞罰を明確にし消防組織の整備につとめた。この嘉慶二年一〇月乾清宮の火災の際、漢兵が城内に潜り込み二日後に發見されるという事件が起きた。嘉慶帝は宮中の治安という觀點からこの問題を重視し、嘉慶一一年六月にむやみに門を開けないこと、出入者の管理を徹底することを命じた。⁽³⁹⁾ 嘉慶一八年九月、天理教信徒が北京内城に侵入するという空前の事件が起こった。天理教信徒と内通して彼らを内城に導いた宦官は凌遲處死に處せられたが、この事件をきっかけに宮中の治安に對する見直しが計られ、翌一九年、綿課らにより火班章程が定められた。章程では宮中だけでなく圓明園にも火班を設置することや出入者管理の具體的方法などが示された。⁽⁴⁰⁾ 嘉慶二四年一〇月一日酉刻、文穎館で火災が發生、火は亥刻になってようやく消し止められた。翌二〇日、救火に力のあった王公大臣らが賞され、⁽⁴¹⁾ 二日には軍機大臣と刑部が合同で文穎館の供事らを審問、厨役李海元の不用心により煤爐の火が壁向こうの書櫃の廢紙に引火したことが原因であることが判明し、失火者の李海元のはか同館總裁曹振鏞、當日の值宿文路らの處罰が命じられた。⁽⁴²⁾ また調査の結果、西華門に集まった王公大臣や機桶が門兵に阻まれて中に入れなかったことがわかった。二二日の上諭で嘉慶帝は軍機大臣からの草稿に大幅な訂正（旁殊）を加え、「一九日は蘇沖阿が值宿であった。西華門にいる以上、（部下の門兵たちに）はつきりと言ひ聞かせて、入れるべきものは入れ、阻むべきものは阻むべきであった。どうして門兵らが王公大臣・官員らに

少しも區別せずに一概に阻止し、かえってひたすら火を消すことに氣を取られるに至ったのか。はなはだ事情をわきまえていない」とあるのを「一九日は蘇沖阿が值宿であつた。すでに西華門を開けよとの旨をうけたのだから必ず西華門にて（門兵たちに）はつきりと言ひ聞かせて、入れるべきものは入れ、阻むべきものは阻むべきであつた。どうして門兵らが自らの考えで少しも區別することなく、王公大臣・官員らを刀の背でやたら打つて一概に阻み、ひたすら素手で火を消すことに氣を取られ、本來の任務を忘れるに至つたのか。はなはだ事情をわきまえていない」と加筆した。⁽⁴³⁾更に續けて「（一旦救火の功績により賞された）蘇沖阿の議敍を撤回し、刑部で審議し處罰する」よう朱を入れている。⁽⁴⁴⁾この事件を教訓に翌月英和らによつて新たな火班章程が定められ、門の出入についてより柔軟な對應をとることなどが新たに盛り込まれた。⁽⁴⁵⁾宮中の消防は門の開閉が一つの焦點となつてゐることが示すように、治安維持の枠組みの中で考えられていた。消火に氣を使いながらも、それによりもたらされる混亂の方により多くの關心が拂われていた。光緒一四年二月一五日夜、貞度門から出火、火は太和門・庫房などに及んだ。恭親王をはじめ多くの王公大臣らが駆けつけ、神機營、歩軍統領衙門の兵丁らが消火に當つた。さらに北京の一五の水會や木廠匠夫らも應援に駆けつけ、火はようやく消し止められた。一七日の上諭では消火に當つた者に銀を與えるとともに、別に上諭を出して當日の宿直恩全の處分を命じた。⁽⁴⁶⁾同じく一七日には軍機大臣への諭において火班の弛緩と器具の不揃いを指摘し、火班の整頓を命じ、内務府・歩軍統領衙門と會同して章程を妥議することを命じた。⁽⁴⁷⁾一九日、軍機大臣は光緒帝からの諭を受け、歩軍統領に一五の水會の首事の肩書きと名前を軍機處に報告するよう指示し、⁽⁴⁸⁾二二日にはこれら首事たちに報賞を授ける諭が下された。⁽⁴⁹⁾翌一五年正月二九日、世鐸らが火班章程を上奏、同章程ではこれまでバラバラだった指揮系統を統一することや、水會の設備に倣つて洋唧筒（洋式ポンプ）を購入することなどが定められた。⁽⁵⁰⁾水會の洋式ポンプの威力を目の前にして用水消火の本格的な導入が圖られた點、從來の爭點であつた門の開閉に言及していない點などから宮廷の消防に對する考え方が變化したことがわかる。

官辦消防では治安維持が重視された。杭州で火災の最大の問題とされたのが搶火であり、消防は様々な都市行政と平行して行われた。特に宮中の場合は治安維持のために消火活動が犠牲になることもしばしばあった。治安維持のための消防という特徴を最もよくあらわしているのが次にあげる成都の例である。雍正五年一〇月から十一月にかけて成都では蠻民による強盜傷害事件が續いた。四川提督黃廷桂は治安の亂れに對處する一策として救火兵丁の設置を願ひ出た。城内の各街巷に堆柵を設け、各柵に兵六名を派遣、パトロールにあたらせ、火災が起これば警戒を強めて（蠻民らが）ほしきままに振る舞うのを許さず、また別に各營二〇名の救火兵丁を置き、消火に當たらせるといふものである。上奏の中で「省城に至つては人家が立て込み、冬の火事は最も豫防すべきものである。往時火事の際、機に乗じて泥棒を働くものが多いと聞いている」とその理由を述べている。⁽⁵¹⁾この例は治安維持のために消防對策が行われた點で特異であるが、治安維持と消防が分かち難く結びついていたことがこうした發想の根源にある。消火方法については初期には専ら破壊消火が行われた。雍正帝の上諭の中ですでに水銃が救火器具に擧げられていたが、乾隆年間⁽⁵²⁾の長沙で用水消火の價値をある程度認めながら積極的に導入するには至らなかつたように、少なくとも清代中期までは破壊消火が支配的であつた。清末においても杭州では依然破壊消火が重視されていたが、その實施には處罰と補償という後ろ盾が必要であつた。整備されていたかのごとき宮中の火班も⁽⁵³⁾同治六年から九年の度重なる火災に際して全く言及が見られないことから、同治年間に機能していたかどうか疑わしい。官は消防に明確な責任を持たなかつたことから、その處理、對策は時々の施政者の裁量に委ねられていた。官辦消防はたとえ組織されたとしても一過性のものであり、多くの地域では保甲、兵丁驅けつけ型の消防に頼つていた。

第二節 民辦消防

民辦消防の一般名稱として「救火會」という言葉がある。救火會は三つの型に分類することができる。一つ目の分類基

準は消火方法で、用水型と破壊型にわけられる。用水型はさらに水龍を有するもの（有水龍型）と有しないもの（無水龍型）にわけることができる。破壊型は天津の公議撈鉤會一例のみである。⁽⁵⁴⁾破壊型の位置づけについては後述する。無水龍型は組織としては非常に緩やかなもので、寶山縣盛橋鎮では「救火會を設けてあるものの、水龍・洋龍はなく、僅かに水桶（屎水桶）などを備えて商店や大村の廟内に分置するだけである。會員から捐金を集めて質に預け、火事が起これば利息金を無力の家に與えて救済する」のみであった。⁽⁵⁵⁾これは消防組織というよりは被災者救済のための金銭講といえる。通縣の東街水會も「ただ水の助けをするだけで激箒（水龍）はな」かった。⁽⁵⁶⁾この型の實例は二例に止まる。實際に少なかったのか、記録として残りにくかったのかはわからないが、二例とも水龍を意識していることから有水龍型の原初的形態というよりはむしろその補完的形態といえる。以上二類型は記録上少數で、一般に救火會といえは有水龍型の組織を指した。地域により水會、水龍局、水龍宮、水龍所など様々な呼稱が用いられたが、本稿では有水龍型の救火會を特に水龍會と呼ぶことにする。清末には多くの水龍會が存在し、その様態は實に多様でそれ自體分析に値するものであるが、ここでは概略を述べるに止める。水龍會の創設者は主に現役・退役官僚や商人たちで、坊や廂といった地域や宗族、ギルドを構成單位としていた。⁽⁵⁷⁾會の運営管理は「董事」や月ごとに入れ替わる「司月」などが行った。⁽⁵⁸⁾現場の指揮を執ったのが司事で、龍夫は司事の指揮の下で水龍や水を運ぶなどの消火活動にあたり、商人、職人、左貢、轎かき人夫などで構成されていた。⁽⁵⁹⁾彼らは平時は仕事に従事し、火事があると消火に駆けつけた。龍夫は消火を行う度に報賞を與えられることもあったが、全くのボランティアの場合もあった。費用は月ごとや火事のある毎に捐金を集めたほか、不動産を購入してその利息でまかなう所もあった。ではこうした水龍會がいつどのように誕生し廣がっていったか、そしてどのような消防を展開したか、本節では天津、常州、上海を例にこの二點にしばって考えてみよう。

最も早く成立した民辦消防組織として天津の水會を挙げることができる。⁽⁶⁰⁾康熙一三年、鹽商武廷豫が同善救火會を設立、雍正年間に長蘆巡鹽使莽鵠立が救火具を捐置してから續々と救火會が設立された。初期の救火會がどのような組織を

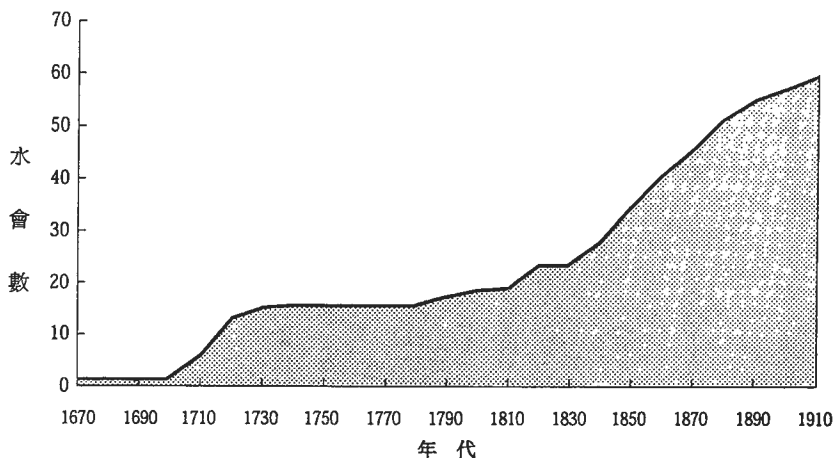


圖1 天津の累積水會數

註(12)陳連生論文のデータをもとに作成。このデータは天津の全ての水會を網羅したものではない。また靜海獨流鎮の保安水會など天津の統計に含むべきでないデータも混入しているが、おおよその傾向をつかむには問題ないであろう。

もち、どのような器具を備えていたかは明らかではない。しかし康熙六〇年設立の桶澤水局以降、ほとんどの救火會が「水局」と名乗るようになるから、少なくとも康熙六〇年以降は用水消火が主となったと見てよい。事實、嘉慶『長蘆鹽法志』が會の設備として挙げるのは號衣(會名を記した救火衣)、水機(水龍)、水桶でいずれも用水消火の道具ばかりである。會は武善と文善にわかれ、武善は消火活動を、文善は事務や資金の調達を行った。會員は商人が多かったが、後には「混混兒」と稱される無賴が入り込むようになった。陳連生は水會の所在地を「商業地區」「官署・富室大戸の住宅地」「水陸交通の要地」の三つに分類している。⁽⁶¹⁾ これらを時間軸上に並べると乾隆以前の水會がほとんど城外東北の商業地區に位置するのに對し、嘉慶以降は城内や「水陸交通の要地」に廣まっていくことがわかる。陳連生の紹介する水會設立年のデータをもとに一〇年ごとの設立會數と累積會數をグラフにしたのが圖1である。圖からは康熙末から乾隆初に一つのピークがあり、道光以降急速に増加していった様子が窺える。

常州では乾隆初年、西倉廂南河沿中街に水龍局が建置さ

れた。⁽⁶²⁾當地での水龍の設置はこれより早く、少なくとも雍正四年にはすでに縣治前に設置されていた。しかし水龍局が次々と誕生したのは乾隆末年から嘉慶にかけてで、そのきっかけとなったのが左廂の水龍局であった。嘉慶初、縣治前にあった水龍はすでに廢されており、また他の水龍も古くて使えないか、でなければ人手不足のためしばしば遅れて火事に間に合わないという状態だった。時に營田神廟で雲車（神輿）を興舉することになった。張聘は該廂の夫役に水龍の人役として協力することを勧め、嘉慶八年春に水龍局發足のための資金集めが始まった。集まった四〇餘萬錢で營田廟附近に家を借り、また主簿行署となっていた營田廟も水龍局に譲られた。これらの建物は道具を置き、水夫が集まり住むのに使われた。この水龍局ができてから常州城内外で二〇餘の水龍局ができたという。⁽⁶³⁾

水龍會設置の契機は様々であった。天津のように官側の働きかけによるところもあれば、常州のように消防の未整備を憂えて設置するところもあった。直接の契機は様々であれ、その根底に共通するのは自己防衛であった。嘉定縣では光緒・宣統年間に水槍を備えて消防の補助とする商家がままあったというし、武進縣では集鎮の商號や農村の富戸にも水龍や水槍を備えるものがあったという。⁽⁶⁴⁾火災に對して眞劍に取り組んだのは比較的裕福な人々であって、失うものの多くないものにとつては高價な機械を買ってまで消防に取り組む必要はなかったし、そんな餘裕もなかった。しかしいくら自衛にとつても他所からの延焼を防ぐことはできない。そこで地域ぐるみの火災對策が必要となってくる。靜海縣獨流鎮の呂鶴九は自分の家を火事から守るためにポンプを買い、他家の消火にも使わせていた。後に周圍の人々が呂に勸告して「平安水會」を設立させたという。⁽⁶⁵⁾官辦消防がほとんど整備されていなかった當時、人々は自らの手で身をそして財産を守らねばならなかった。⁽⁶⁶⁾その核となったのが火災で失うものの大きい地域の有力者や商人であったのは當然といえよう。こうして同じ地域に住み利害を共有するものを中心に水龍會が作られたのである。⁽⁶⁷⁾次に常州における水龍局の廣がりを見ていこう。表1は道光二二年『武進陽湖縣合志』、光緒五年『武進陽湖縣志』、光緒一四年『武陽志餘』所載の水龍局を一覽にしたものである。⁽⁶⁸⁾道光年間の狀況を示した『武陽合志』からは水龍局のほとんどが城廂に集中していること、中でも

表1 常州水龍所在地表

	郷圖名	道光*	光緒**	設立年代
城	子城圖一	1	1	1811
	子城圖二	1	1	
	西 右 廂	1	2	
	左 廂	1	2	1803
	東 右 廂	1	1	1830
	中 右 廂	1	1	1794
	河 南 廂		1	
廂	西 直 圖	4	3	乾隆年間 (1736—1795) 1736, 1780
	西 半 圖	1		
	西 倉 廂	3		
	懷 南 廂	3		
	北 直 圖	3	1	1765, 1802
	東 直 圖	3	3	
郷	懷 南 郷	1	4	
	鳴 鳳 郷		2	
	欽 鳳 郷		1	
	旌 孝 郷		1	
	孝 西 郷		2	
	依 東 郷		2	
	通 江 郷		5	
	大 寧 郷		2	
	豐 南 郷		1	
	政 成 郷		1	
	安 尚 郷		3	
	定 東 郷		1	
	定 西 郷		2	
	惠 化 郷		1	
	太 平 郷		1	
	新 塘 郷		1	

* 道光二年『武進陽湖縣合志』卷五營建に據る。

** 光緒五年『武進陽湖縣志』卷三營建と光緒一四年『武陽志餘』卷三善堂公所に據る。とくに城廂において『武進陽湖縣志』と『武陽志餘』の記事が食い違う。ここでは城廂部分については假に『武進陽湖縣志』に依據しておく。

城外の廂に集中していること、これら城外の水龍局の設立年代が城内の水龍局より古いことが見て取れる。常州城の南には大運河が走っており、常州城外は商業地區となっていた。設立者が明らかな例は少ないが、商業地に立地していること、西城の布店が水具を多く有していたこと、また東直圖(夾城圖)水龍局の設立者が「鹽業衆姓」であることなどから、水龍局の設立に商人が深く関わっていたことは明らかである。光緒年間になると分布に大きな変化があらわれる。水龍局は常州城から遠く離れた各郷に廣がり、しかもそのほとんどが鎮に置かれている。水龍局は城外の商業地區で誕生し、城内、ついで郊外の鎮へと廣まっていたのである。(70)

上海同仁堂の道光一一年の徵信録には「擔水濟急條約」なるものが含まれ、上海では少なくとも道光年間には善堂が消防を擔っていたことがわかる。(71)一方、租界では咸豐二年には救火會が設立されていた。消防を行っていた善堂の一つ、上海果育堂の「救火章程」はその冒頭で「救火の法はまず水龍あるいは水鎗を重視する」と述べ、水龍を各坊廂、各郷村に

備えるべきだとする。このほか火鉤、水斗、銅鑼、燈籠、草鞋、火把なども公所に備え置くことを規定している。ここで挙げられた道具のうち破壊消火で用いられるのは火鉤だけである。第九條では「火勢が蔓延したら急いで火鉤で家を破壊して延焼を免れるべきである」と破壊消火に言及するが、全九條のうち七條は水龍に關する規定であり、これから用水消火が主で破壊消火は副次的役割しか與えられていないことがわかる。⁽⁷²⁾官辦消防に屬する杭州や湖南省の章程と上海果育堂のこれらの章程を比べて見ると、破壊消火から用水消火に重點が變化したことも重要であるが、さらに顯著なのは前者で大半を占めた治安維持や都市行政に關する條文が後者には全く見られないという點である。この消防の治安維持からの獨立、専門化が民間に消防組織を普及させる大きな要因となったと考えられる。官辦消防における消防を「治安維持のための消防」と定義するなら、民辦消防における消防は「消火のための消防」と定義できよう。この「消防」概念の變化の意味については次節で詳述する。

民辦消防の多くは「水」や「水龍」をその名に含むように用水消火を主としていた。しかしこれは破壊消火が全く行われなかったということの意味しない。上海果育堂の救火章程には破壊消火への言及が見られたし、合川縣の兩益局も救火器具として西法水龍や西法水鎗と並んで鋸子、斧頭、鉤などを擧げている。⁽⁷³⁾また上海英租界の救火會も破壊消火を行っていた。⁽⁷⁴⁾建物が難燃物で作られるようになるか、容易に破壊できない建て方で建てられるようにならない限り、建物を破壊して火路を斷つのは有効な、時として唯一の消火方法であった。ただし救火章程における破壊消火は「火災が蔓延したとき」のいわば最後の手段であり、通常用いられていたわけではなかった。天津では百を超える水會があったが、破壊型の公議撓鉤會はそれら多くの水會が出そろった頃に作られた。つまり天津では消防組織が發達していたからこそ、破壊消火の専門分化が可能だったといえる。民辦消防において破壊消火は副次的なものでしかなかったのである。

天津では康熙一三年に早くも救火會が設立されたがこれは例外的に早い例で、他の地域で水龍會が設立されるようになるのは乾隆年間以降である。⁽⁷⁵⁾常州や天津では城外の商業地區でまず水龍會が設立され、次第に城内や郊外の鎮に廣がって

いった。清末に存在した水龍會のほとんどが同治・光緒年間にできたもので、再建・創建を含めてこの時期に水龍會が急激に増加した。たとえば清末の天津には百を越える水會があったし、漢陽では「百を以て計る」ほどの水龍局があった。⁽⁷⁶⁾民辦消防はこうした大都市だけでなく鎮や村にまで廣がっていた。例えば蘇州の南西にある太湖廳では各村に水龍があったという。⁽⁷⁷⁾實際同治年間の魚鱗冊を見ると、鎮ばかりでなく村にも「水龍局」「水龍基」といった登記名が見られ、驚くほど末端にまで水龍會が浸透していたことがわかる。⁽⁷⁸⁾ただし本稿で扱った水龍會の所在を見ればわかるようにその分布は大きな偏差を伴っており、官辦消防はおろか民辦消防さえない地域も數多く存在した。⁽⁷⁹⁾清末の中國では一方に上海や天津に見られる高度に組織化された消防があったが、もう一方にはその場限りの駆けつけ消防にたよるしかない、つまり消防組織を全く持たない地域も數多く存在した。組織化の程度は様々であり、さらに官辦、民辦という組織主體の別もあった。清末の消防はこのように複雑な様相を呈していた。

第三節 官辦消防から民辦消防へ

前二節の考察から官辦消防と民辦消防が破壊消火と用水消火をそれぞれ展開してきたことが明らかになった。今、この二つの指標を組み合わせて兩者をそれぞれ「民辦・用水消防」「官辦・破壊消防」と表記すると清代消防史は「官辦・破壊消防」から「民辦・用水消防」へという圖式で表すことができる。⁽⁸⁰⁾この変化は何を意味し、「民辦・用水消防」すなわち水龍會の誕生はどのように位置づけられるのだろうか。

家屋の破壊という行為は火路の切斷という意味づけを失うと、強盜や盜賊の行為と區別がつかなくなる。實際、火災現場で救火兵に紛れて強盜を働くものが絶えなかったし、救火兵も強盜を働いた。人々は家を壊されるくらいならむしろ焼かれてしまった方がいいとさえ感じていた。⁽⁸¹⁾破壊消火の實行に強い強制力を要したのは勿論だが、治安維持、破壊家屋の限定、被災者への補償など消火活動以外の様々な面での配慮が必要だった。水龍の登場により用水消火に重點が置かれる

ようになると、破壊消火の場合のような強制力や社會的配慮は必ずしも必要でなくなる。夫馬進は上海同仁堂の道光一二年と二九年の消防經費について、善堂の總支出に占める割合がそれぞれ三%、一%しかないことから、「我々の感覺からすればもっとも都市行政と密接な消防事業は大きな地位を與えられていなかった」とする⁽⁸²⁾。逆に言うところ、消防は他の善舉に比べて安上がりで實施しやすかったといえよう。消防の概念の變化が消防の實施を容易なものとし、民間での消防組織の設置を促すことになったのである。破壊消火から用水消火への變化を象徴的に示すのが『春秋左氏傳』の「徹小屋、塗大屋」一節の捉え方の變化である。この記事は襄公九年の宋の火災の折、司城の樂喜がとった處置について述べたものである。火の回っていないところでは小さい建物を破壊し、大きい建物は土で塗り込めたこと、そのための水や土を用意したこと、外敵の侵入に備えたこと、倉庫や宮殿を警備したこと、人夫を火災現場に向かわせたことが敘述されるが、火災現場で何が行われたかについては觸れられていない。郷正や祝宗に消火を祈らせたことから、火路を斷った後は天に任せるはかなかったのだろう。清初の毛奇齡は「杭州治火議」において「備水器、蓄水潦（水を入れる器を備え、汲んだ水や溜まり水を蓄えておく）」は杭州では無用とし、「徹小屋、塗大屋」こそ第一の良法だとしている。毛は用水消火を焼け石に水として否定し、破壊消火を有効な消火方法とし、最終的には建物を難燃物で構築することで火災の被害を防ぐことができるとする。しかし乾隆年間、杭州の救火章程に平時から水を蓄えておくとの規定があるように、用水消火を完全に否定するのは當時としては特殊な考え方であった。とすれば春秋の宋の消火方法と清初の杭州の消火方法に大きな違いは見られない。一方、嘉慶年間の常州の水龍會について述べた「左廂捐置水龍碑記」でも「徹小屋、塗大屋」の一節が引用されているが、「徹小屋、塗大屋」についての言及はなく、それに續く「備水器、量輕重、具正徒」という部分に焦點が移っている。しかもそこでは「水器」は水を入れる器ではなく水龍を指し、「量輕重、具正徒」は各水龍會が消火に向かう際の組織だった行動を指している。破壊消火においては具體的な行動指針であった『春秋左氏傳』の一節は用水消火においては水龍會の設備の充實と規律ある行動への單なるメタファーにすぎなくなっている⁽⁸³⁾。

清末には官辦消防と民辦消防が併存していた。官辦消防と民辦消防、そして官と民辦消防はどのような關係にあったのか、少し考えてみよう。光緒一四年の貞度門の火災で民辦消防が大きな役割を果たしたことは先述した。宮中の火班は光緒帝がその弛緩を指摘したように規律や意欲に缺けていた。⁽⁸⁴⁾ そのため大規模な火災に對處できず、水會の協力が必要とした。一方水會の方も官の協力を必要としていた。北京ではこのように官辦消防と民辦消防は協力關係にあった。官辦消防が整備されていた北京ですらこのような狀況であるから、兵丁驅けつけ型の消防に頼っていた地域では民辦消防の協力が不可欠であった。時に地方官は火災の責任を負わされることもあり、民辦消防の充實は官にとっても關心のあることで、官が民辦消防を勧めたり資金を援助したりするケースも見られる。巴縣の消防は官民の關係を考える上で興味ある一例である。同治七年に知縣王宮牛の勸諭により紳民が水龍を購入し夫役を募つて坊ごとに水社を作つた。光緒九年には知府唐翼祖、知縣國璋が城内四八坊に水會を作らせ、縣城隍廟に水會公所を設けて八省紳商に交替でその管理にあたらせた。宣統三年六月には警察が成立し、消防は警政の要政とされて水會は警察と協力することになった。民國五年には軍事的緊張のため水會の水龍を警廳に登録し、警廳がその監督管理にあたることになった。民國一四年、警廳が消防捐を擯取したことから市民の抗議にあい、警廳長袁恩焯は民辦の消防聯合會設立を許した。巴縣ではこの後も市政府の指示を受けて消防聯合會が整備されていった。⁽⁸⁵⁾ 巴縣の消防の特徴は官がイニシアチブをとり續けたことである。しかし官は決して自ら消防を組織することはなかった。この狀況を變えたのが「消防」概念の導入である。「消防」は日本語からの借用であるが、單に言葉だけでなく日本の消防制度、消防の考え方も同時に取り入れられた。北京では光緒二九年に警務學堂に消防科が附設され日本人がその教官として招かれた。のち京師消防隊の教科書として作られた『消防匯編』が唱える消防は「消防警察」という語が示すように警察に屬すべきもので、最終的には國家の組織する常備消防であつた。⁽⁸⁶⁾ しかし巴縣では警察が消防を完全に取り込むことができず、警廳の消防捐擯取を契機に消防は警察の手を離れ、再び民間で運営されることになった。『內政年鑑』に見える民國一八年の中國全土の狀況を見ても官辦消防が機能していたのは省都をはじめとする僅

かな地域に限られ、本當の意味での官辦消防が整備されるのは人民共和國になってからである。⁽⁸⁷⁾

巴縣では宣統三年に官辦の治安維持機關である警察が設立され、それとの關係を深めていく中で消防は治安維持として市政の一環として地方政府に取り込まれていった。地方政府が消防を取り込み、消防がより廣い觀點からとらえられるようになったきっかけの一つは宣統二年の城鄉鎮地方自治章程の制定である。例えば寶山縣楊行では宣統二年自治成立を機にそれまで民間で行われていた消防が郷公所に移管されている。⁽⁸⁸⁾ 消防は地方自治の一つとして位置づけられ、以後いくつかの地域では地方政府が消防を管轄、もしくは費用を負擔するようになった。同時に消防が行う事業の範圍も擴大した。

救火聯合會の成立もこうした一連の變化の一面面としてとらえられる。例えば上海では各救火會同士の對抗意識が強く火事場での諍いが絶えなかったこと、租界の保險商が中國側の火政の不備を理由に租界の救火會を租界外へも派遣することを要求していたことなどから、光緒三四年二月に救火聯合會が設立され、亂立していた救火會が整理統合された。⁽⁸⁹⁾ 水龍會

は一般にギルド、宗族などを單位に組織されていた。中國の都市では同業者や同郷者が集住する傾向があり、水龍會は同時に地域的な組織でもあった。地域内の小規模な火災については問題ないが、火災が廣範圍に亘ると指揮系統の缺如のため水龍會同志の争いが起こることになる。こうした問題を解決するため上海以外の地域でも聯合會が組織されるようになる。聯合會の成立は一つの都市を單位に、より大きな觀點から消防を行うことを可能にした。これは單に地域的な擴大を

意味するだけでなく、治安維持や都市計畫など「消防」に含まれる分野の擴大をももたらした。消防に含まれる分野の擴大には技術的な要因も關與している。清代半ば以降に中國で廣まった水龍は、性能は今一つだったがそれでも一臺につき

二〇人から三〇人の水夫（水汲み係）を必要とした。上海では水龍よりも更に高性能の洋龍を使っていたが、取水に困り各地に井戸を掘らねばならなかった。⁽⁹⁰⁾ 寶山縣江灣では道を廣げることや井戸を開くことが救火會の最重要事業とされた。⁽⁹¹⁾

後に上海救火聯合會會長となる李鍾珪は光緒一〇年に南市に水道を設置することを建議したが、その前年に租界で水道が完成し、李はそれを目の當たりにして城内の河が淤塞して不衛生なこと、引潮の時に取水できず火災の被害が擴大するこ

とを理由に水道設置を建議したのであった。もはや消防が消防⁽⁹²⁾だけではなくっていたこと、そして水龍會だけでは遂行できなくなっていたことを物語る。西洋から蒸氣ポンプが導入されポンプの性能が向上すると水の確保はますます重要な問題となった。

本章では清代消防史が「官辦・破壊消防」から「民辦・用水消防」への變化としてとらえられることを示した。水龍という新たな道具が導入されることにより、基本的に水龍を購入し人手を集めるだけで消防が可能となったのである。こうして破壊消防から用水消防へと消防技術が變化したことにより、消防の概念自體が大きく變わった。治安維持や都市行政と不可分の關係にあったそれまでの消防が消防のみに専念するようになった。消防がこのように簡素化、専門化したことで民間での實施が容易になった。こうしてこれまで地方官の行政範圍に基づいて考えられていた消防がギルドや宗族を基盤とした小地域の自衛手段となり、不十分な官辦消防の閑隙を埋めて徐々に廣まっていた。用水消防への轉換と民辦消防の誕生・普及が時を同じくするのは理由のないことではない。清末になると聯合會が結成され都市單位で消防が行われるようになる。消防が自治に取り込まれ、治安維持や都市行政と再び結びつくようになるのもこの時期である。清末以降の消防は地理的・分野的に再擴大していく過程としてとらえられる。

第二章 水龍の普及と言説の展開

前章では「官辦・破壊消防」から「民辦・用水消防」への變化を分析した。しかしなぜ用水消防への變化が起こったかは個々の事例分析から導き出すことはできなかった。この問いに答えるには用水消防の主役である水龍について考察する必要がある。

水龍はもともとヨーロッパで發明、使用されていた消防器具で中國に傳わたのは明末である。これとは別に水龍は順治初、上海の唐氏が日本人から入手したという説がある。江南の地方志を見ると、この説が散見される⁽⁹³⁾。では水龍の傳來

は日本の方が早かったのだろうか。日本では消防ポンプのことを「龍吐水」といったが、その由來については諸説ある。

①寶曆四年（一七五四）、長崎でオランダ人の指導により製作された。⁽⁹⁴⁾ ②寶曆年間（一七五一―一七六三）には平野屋藤兵衛

らによる萬龍水、檜屋利兵衛による龍起水、天王寺卯兵衛による鮮龍水、雙竜水、近江大塚田中久重の雲龍水があった。⁽⁹⁵⁾

③天明（一七八一―一七八八）ころ、オランダから輸入されたブランドスポイトなるものを大坂の町人が買い、時計師に作

らせた。⁽⁹⁶⁾ 魚谷増男はこのほか寶曆元年（一七五二）四月にすでに江戸で龍吐水が賣り出されていたことを示す史料をあげ

ている。⁽⁹⁷⁾ 従って、日本に入ってきたのは寶曆年間よりさらに遡るものと思われる。しかし中國ではこれより百年以上も前

に伝わっていることから、日本人がもたらしたという説は再検討を要する。原文では倭人から入手したとあるだけで、日

本から輸入したということではない。⁽⁹⁸⁾ 當時海外にいた日本人がヨーロッパ人から入手し、中國にもたらしたと考えるのが

妥當であろう。日本では鎖國令がしかれており、海外にいた日本人は日本へ戻ることができなかった。そのためこの時に

は日本へ伝えられず、一八世紀になってようやくオランダから傳わったのであろう。

明末の王徵『遠西奇器圖説』に紹介されている水銃（水龍）は腕用ポンプ（Grapple）と呼ばれるものである（圖2）。

水桶の中にピストンのついた二つの銅筒が設置されている。銅筒には出水口と入水口があり、兩筒の出水口は逆Y字状の

銅管でつながれ放水管となっている。二つの銅筒は木の棒で連結されており、これを（二―八人で）シーソーのように上

下させる。一方の筒に水が入ると一方の筒からは水が出て、水をとぎれることなく供給することができる。ヨーロッパで

は一六二四年にオランダでエクスターが小型手動ポンプを、一六五五年にはオランダのハウツウシェが大型消防ポンプを

發明していた。⁽⁹⁹⁾ ホースの發明は消防ポンプの形態を大きく變えた。それまではポンプ自體に貯水機能を持たせていたた

めどうしても筐體が大きくなった。また放水管も上下左右に回転するとはいえ、放水範圍は限られており、放水箇所を

變えるにはポンプ自體を動かす必要があった。一六七二年にオランダのハイデ兄弟により發明されたホースつきポンプ

はこうした問題点を解消した。ホースの出現でポンプ自體が貯水裝置を備える必要がなくなつて小型化し、放水位置を



圖2 王徵『遠西奇器圖說』卷三「水銃」

ホースの範囲内ではあるが自由に變えることが可能になった。ただし初期のホースはしばしば破裂したのでイギリスやアメリカでは依然腕用ポンプが使われていた。ホースが一般に使用されるようになるのは一八〇七年のセラーズによる改良を経てからである。⁽¹⁰⁰⁾

王徵は水龍の能力を高く評價し、城邑村坊に二、三具つつ備えれば消火におおいに有益だとしている。そして早くも清初の杭州では西洋水車が消火に使われていた。康熙年間には吳璥が「水櫃歌」と題した詩を詠んでいる。⁽¹⁰¹⁾康熙初蘇州の程肇泰は西洋の法に倣って水龍を自作した。折しも城西の昇平里で火災があり、程は自ら水龍を用いて消火に當たり火を消し止めたことから、蘇州では競って水龍が作られたという。⁽¹⁰²⁾康熙年間にはこのほかに史料がなく、あまり普及しなかったようだが、雍正年間になると雍正六年の上諭の影響もあって各地で水龍の記事があらわれるようになる。⁽¹⁰³⁾雍正四年にはすでに常州城の縣治前に水龍が設置されていたし、⁽¹⁰⁴⁾天津でも雍正年間には水機が使われていた。⁽¹⁰⁵⁾乾隆八年の「酌議救火條規」から當時江浙で翻車や水櫃が使われていたことがわかるし、⁽¹⁰⁶⁾南京では知府が水龍を率いて消火に當たり、⁽¹⁰⁷⁾揚州では余觀徳が水砲（水龍）を設置している。⁽¹⁰⁸⁾趙懷玉『亦有生齋續集』

では「今、北方の家では水桶を備え、南方では水龍がよく用いられる」とあり、當時（嘉慶初）中國の南北で救火器具にちがいがあつたことを指摘している。趙は續けて水桶の水は漏れたり乾燥したりしやすく、また遠くへ水を飛ばすこともできないが、水龍は携帶に便利で水を普く撒くことができるとして水龍の利を説いている。⁽¹⁰⁹⁾ 嘉慶年間以降は北方でも徐々に水龍が廣まっていた。

水龍が使われる前の救火器具としては噴水筒、水桶や建物破壊用の火鉤、麻搭など比較的單純な道具ばかりであり、さほどメンテナンスを必要としなかった。ところが水竜は構造が複雑な上に、その扱いにも數人を要したので、定期的に人を集めて點檢しなければならなかった。水龍の維持にはある程度の組織と資金が必要とされたのである。水龍のこうした特徴は消防組織の組織化を促した一因に擧げることができよう。⁽¹¹⁰⁾

江南では五月二〇日の分龍節に水龍の演習が行われた。この演習は「水龍會」と呼ばれ、上海では各救火會の水龍が様々な飾りを施され、演武場に集まつて放水の高下や會員の技能の優劣を競った。文武の官員を含め大勢のものが見に集まり、水は五色に染められて大變賑やかだったという。⁽¹¹¹⁾ 「水龍會」は水龍を點檢し、會員の技量や水龍の優劣を競い合う場であった。それは會員相互の絆を深め、消防技術を高めるといふ效果があつたが、「見せ物」としての一面をも持つており、社會に對する效果も輕視できない。水龍が様々な色の水を吹き上げて競い合う様子は人々を驚かせ樂しませると同時に水龍ひいては水龍會に對する信頼を植え附けた。またそれは火事に對する意識を呼び起こす數少ない機會でもあつた。「水龍會」の記録は管見の限り同治二年『南潯縣志』が最も古い。⁽¹¹²⁾ 蘇州の風俗を詳細に記した『清嘉錄』（道光十一年刊）には分龍日の記事はあるものの水龍の演習についての記事はない。また水龍自體が乾隆年間以降徐々に廣まつたことを考え併せると、この行事の起源を一九世紀中頃に求めることができよう。同治、光緒年間の記録は『平望志』、『菱湖鎮志』といずれも太湖南岸の市鎮であることから、この地域で始まったと思われる。⁽¹¹³⁾ 以後「水龍會」は江南の各地に廣まり、民國二五年には江蘇省全域で五月二〇日と一〇月二〇日に消防大會を行うことが決められている。⁽¹¹⁴⁾

嘉定縣黃渡鎮では「六月二三日賽神の後に水龍を試演して破損がないかを點檢」した。⁽¹¹⁵⁾ 天津近郊の靜海縣獨流鎮には「水會」という組織があり、最も古い水會は咸豐年間設立されている。水會は年一回、農閑期に齋會を開き、食事をもにして會員相互の親睦を圖る。そして齋會の前にポンプの修理を行うのである。修理が終わるとポンプを水會のポンプ庫の前に陳列し旗を立てる。これは修理が終わったことを人々に知らせさせて安心させるのと、建物内部をあけて會合に使うためだといふ。⁽¹¹⁶⁾ 後者は一九八八年のインタヴューによるもので、インフォーマントの語る水會の状況は最も早くて一九二〇年代、おそらくは一九三〇年代以降のことと考えられる。獨流鎮の例では宗教色が抜けているが、ポンプの點檢修理の後に齋會を行ったことが宗教との関わりのあった痕跡を残している。五月二〇日の例でも祭祀との關連を示すものがある。『烏青鎮志』では「二〇日は分龍日で、各坊の義龍が西寺前の廣場に集まり、放水の實演をする。昔は龍神戲があったが、今は廢れた」とあり、⁽¹¹⁷⁾ 『平望志』ではこの日「救火の水龍を駕湖濱にもって行き、試演する。またこれを祭る」とする。龍神祭祀が水龍演習に變化したばかりでなく、水龍はその神性をも受け継いだようである。獨流鎮でポンプが陳列されるのも、もともと祭祀があつた名残だと考えられる。⁽¹¹⁸⁾ 水龍は單なる器具ではなかつた。「水龍會」が五月二〇日に選ばれたのは、この日が龍神に關係する日であつたためであらう。⁽¹¹⁹⁾ 黃渡鎮で水龍演習が行われた六月二三日は火神の誕生日であり、いずれにせよ消防と關係の深い日を選んでいことがわかる。「水龍會」の事例は水龍が消防の中心的存在として考えられていたことを示してくれる。いやむしろそれは水龍會の象徴的存在ですらあつたのである。

先述の通り中國に傳つた消防ポンプはホースのない腕用ポンプであつた。清末の『點石齋畫報』にはヨーロッパから輸入された新型の蒸氣ポンプと並んで腕用ポンプが描かれている(圖3)。『遠西奇器圖說』の腕用ポンプと比較すると構造はもちろんのこと、デザインに至るまで全く同じであることがわかる。中國の消防ポンプは清末にヨーロッパから新型の消防ポンプ(洋龍)が入ってくるまで變化しなかつたのである。王徵は『遠西奇器圖說』において水銃の效能を次のように述べる。⁽¹²⁰⁾



図3 『點石齋畫報』行集「奮身救火」

ている火を消すばかりでなく、まだ燃えていない火を防ぐこともできる。圖説があるからにはこれを作るのも難しくなく、工費もそれほど高くないので、あらゆる城邑村坊でこの器具を二、三臺置くべきである。それは火災を防ぎとどめる上で最も益するところがあるのだ。すでに試作品を作って試したところまことに効果があつた。民に仁を施すことを志すものはこれを作って廣めるべきである。

王徵は自ら水銃を試作してその効果を確かめており、彼の水龍に對する評價は決して大げさなものではない。それまでは放水用具と言えば水桶や水鐵砲くらいしかなかったことから水龍の威力は實際以上に大きな印象を与えたことは想像に難くない。ただ問題はそれが火災の現場で役に立つかどうかである。王徵の少し後、毛奇齡は「西洋水車（水龍）に至っては、水が空中を飛ぶものの、火に届かず、かえって車輪がぶつかり合つて道路をふさいでしまう」と水龍が實際の消火活動で障害となつた事實を指摘している。⁽¹¹²⁾ 王徵の紹介した水龍は水槽と一體化していたので筐體が大きく重かつた。その

この水銃は火を消すことができ、また火を防ぐこともできる新型の機械である。その能力は最便、最大、最奇で、どんな機械もその效用においてこれに適うものはない。倉卒の折、火が燃えさかつて人が進むことができない時でもこの新器があれば五、六人で數百人の用にかえることができる。その上一滴水の水すら無駄にしない。どれだけ高く遠くてもたちどころに水が達し、大雨が降り注ぐ如く水を噴き、水が届かない所はない。すでに燃えて

うえ放水口の角度が固定されているので放水箇所をかえるには水龍自體を動かさねばならなかった。初期消火ならまだしも、一旦延焼が始まるととても太刀打ちできるものではなかった。當時の交通事情や火災報知の状況を考慮すると水龍が到着する頃には火災はほとんどの場合手遅れになっていたと思われる。こうした實際の消火における経験から、乾隆八年の「酌議救火條規」では水銃、翻車は水勢が甚だ大きく最も火に敵することができるとしながらも、形體が大きく重いので家の軒下まで運ぶことができず、また水が上下する毎に瓦に阻まれて軒の脇の水が流れ落ちる（火元に水を効率よく散布できな）ことなどから、うまくつかうには製造法を講究し使用法を入念に學ばねばならないとする。⁽¹¹⁷⁾ 乾隆二〇年の規條では筐體が大きく重いので役に立たず、また未熟な者が正しく扱わなければ形だけのものになってしまう。一方擠筒は放水も輕便であることから擠筒を採用することになった。しかしその擠筒さえ當地で使うものが少なかったので、文武各官に製造法や使用法を學ばせている。⁽¹¹⁸⁾

以上、水龍が實際の消火に役立たなかったこと、當時の人々、特に消火に取り組む人々にそう認識されていたことが明らかになった。ところで先述したとおり水龍は清末までほとんど改良を加えられなかった。では清中期以降どうして急に水龍が使われ始めるようになったのだろうか。そのきっかけが何だったかを考えるには水龍に關する言説のもう一つの系譜を辿る必要がある。

毛奇齡とはぼ同時代の吳璟は「水櫃歌」の自注に「世に傳わる西洋水櫃（水龍）は救火の器具である。櫃の部分は木製で、斛は銅製である。筒の下には機軸がつながっていて、人力でこれに壓力を加えると水が噴射する。上下左右思いのまま、遠く數十歩まで届く。近來福建の人たちもこれを作ることができる」と記す。⁽¹¹⁹⁾ 吳は火災現場で水龍を見たわけではない。水龍の威力は確かに目を見張るものがあつた。ここでもう一度乾隆『蘇州府志』の記事を振り返ってみよう。蘇州の程肇泰が西洋の法に倣つて水龍を製作した。その水龍は數十丈も水を噴き、水が向かうところ火はたちまち消えてしまったという。この時点で蘇州の人々はこの水龍に大きな關心、期待を寄せていたであらう。おりしも昇平里に火災が起

き、程は自ら水龍をもって消火に向かった。そして見事消火に成功し、以後蘇州の人々は競って水龍を作ったという。⁽¹²⁶⁾ 程の水龍が昇平里の消火にどれほど貢献したかはわからない。水龍が使われ、火が消えた。この二つの出来事は、その因果關係はわからないが、人々に水龍の効果を確信させるのに十分であった。そして一旦このように效能を示し、それを稱揚する言説が形成されると、その言説はたちまち廣がり、人々の間で水龍に對する信頼が共有されることになる。こうした水龍觀が定着すれば、もはや人々は水龍は必ず火を消し止めるはずだという固定觀念を通してしか水龍を見ることができなくなる。消火に成功すればもちろんのこと、たとえ失敗してもその原因は別のものに轉嫁され水龍に對する評價は高まることはあっても減ずることではないのである。水龍に神性を見いだしていた地域もあったのは先述の通りで、水龍による消火は同時に火神祝融と水龍との戦いでもあった。以上の觀點から水龍を評價する一連の言説を「水龍神話」と呼ぶことができるであろう。それは消防の現場からかけ離れたところで形成された憶測、期待にすぎないが、人々に共有された途端、それは「事實」としてたちあられる。清初に水龍が否定されたときに比べ、清代中期以降、人口が急増し都市はますます過密になっていった。易燃物の建物が密集した状況では破壊消火の効果が高まることはあっても、水龍の効果が高まることはなかったはずである。しかし實際には水龍が破壊消火に取ってかわった。そしてこの變化の背景に水龍神話の形成と廣がりがあった。⁽¹²⁷⁾

かつて郡廟に火撓や第撓などを置き、牆を推し倒し棟を引き倒して僅かに鄰室の延焼を免れるだけであつたが、水龍の效果たるや雨を吐き雲を起こし、たちまち天の心をして禍をもたらしたことを後悔させる。その效用は偉大でその利益は大變大きい。⁽¹²⁸⁾

こうして「火勢を殺すること他器に百倍する」「救火第一の器具」⁽¹²⁹⁾ などといった水龍に對する無條件の信頼、過信が確立されるが、この水龍神話は清末にいたって危機に瀕する。

清末の水龍に對する評價のゆれは『點石齋畫報』の中に顯著にあらわれている。漢口で船が炎上したとき、川岸の二臺

の水龍が放水すると「回祿氏（火神）はこれに適わないことを知って、ようやく旗を倒し鼓を止めて逃げ失せた」⁽¹³⁰⁾。ここでは水龍神話は依然健在である。一方、寧波定海廳署附近の豆腐店から出た火は折からの北風にあおられ、祝融氏の跋扈飛揚を招いた。當地にあった六臺の水龍が放水したが焼け石に水で、火はついに三臺の水龍を呑み込み灰と化してしまった。⁽¹³¹⁾後者の例では水龍が用をなさなかったことが「噴水無爲」という言葉で表され、水龍が必ずしも萬能でないことが認識されている。こうした水龍神話のゆらぎを象徴するのが「水龍被焚」という記事である。まず前置きとして水龍は街の賑やかなところや人家の密集したところに必ず備えるべきものとされ、「もし火災にあつても一度水龍が到着すれば、たとえ祝融氏でも出る幕もなく引き返さざるを得ない」と水龍の效能を説く。廣東省新基の海關驗貨廠の近くで火災が起きた。救火者らは廠に備えてある水龍で「楊枝の水（起死回生の甘露水）を一かけすれば火鴉の軍を撃退することができる」と考えていた。彼らの持っていた水龍に對する絶大な信頼は、圖らずも裏切られることになる。水をかけても火を煽り立てるだけ、あつと言ふ間に驗貨廠は火の手に包まれ、三臺の水龍も燃えてしまった。文章は次のように結ばれている。「そもそも水龍は救火のためにあるものである。しかるに火がまだ消えていないのに水龍が燃えてしまった。一體火の勢いが強くて撲滅できなかったのだろうか、それとも人のはかりごとが善くなかったのだろうか」⁽¹³²⁾。

水龍の無力さを目のあたりにしたことのほかには水龍神話を崩壊に導いたもう一つの要因は高性能の水龍の登場である。

新たに西洋からもたらされた水龍（洋龍）はホースつきの強力な腕用ポンプであった。⁽¹³³⁾史料上、中國で最も早く洋龍を採用した水龍會の一つとして咸豐二年に設立された上海英租界の救火會が挙げられる。佛租界でも同治二年に洋龍が設置されている。⁽¹³⁴⁾上海以外の地域で洋龍が使われ始めるのは光緒年間以降で、嘉定縣では光緒元年貽福堂に洋龍が置かれ、光緒六年には城區で洋龍が購入された。⁽¹³⁵⁾黃渡鎮では光緒二十四年の除夕に北鎮で火災が起こったが、同治、光緒初に購入した各水龍は水力が弱く、遠くまで水を飛ばすことができなかった。一方南鎮の德隆醬園の洋龍は河を隔てて放水したにも関わらず水力が強く大變役に立った。このことから北鎮でも洋龍二臺を備えるに至った。⁽¹³⁶⁾高性能の洋龍の到來は從來の水龍の缺

點を露わにし、人々の目を洋龍に向かわせることになった。胡祥翰は水龍について「堅木で桶を作り良錫で筒を作る。重さは百斤ほどあり、これを擔いでいくのは大變困難である。のち臺車を用いるようになったけれども、人力を用いて牽引したのでまだなお遅く、放水もそれほど高く遠くまでできなかった」と言っている。⁽¹³⁷⁾しかし水龍神話が崩壊したのではない。確かに一部の消防の現場では水龍の缺點が認識されていたが、水龍への信頼はなおも健在であった。

(四、五人の上半身裸の男が提燈を持って走りすぎた後) 六、七人の工人が一臺のとても大きい鐵の水龍をひいて同じような速さで走っていった。……私はその大きな鐵の水龍を以前救火會で見たことがあるが、どう見ても最低一七、八人が擔ぎ棒を持ってようやくくぐるといった感じで、六、七人で飛ぶように引く張っていきけるとは思ってもみなかった。彼らはただ口中で「救」と叫ぶことに一所懸命で、あのように何事もないかのようにこのばかりでいい道具を引っ張って一直線に突っ走っている。彼らの足取りと水龍の車輪が歩調を合わせるかのように躍動し、鐵面無情の水龍も彼らの熱狂が移り、自らの力で後について走っているかのようにだった。⁽¹³⁸⁾

これは民國に入ってから描寫であるが、水龍に對する期待、信頼を見て取ることができよう。胡祥翰は洋龍ですら自然に淘汰されてホース車に代わったと述べているが、水龍から洋龍、更に新式の諸機械にスムーズに移行したわけではない。洋龍の威力を見せつけられて洋龍を二臺購入した黃渡鎮では、洋龍のあった南鎮に水龍を二臺添置している。

これまで述べてきた中國における水龍受容の特異性を示すために日本のそれと比較してみよう。中國の水龍會にあたるのは町火消であるが、完全な民辦ではなく、行政の一部に取り込まれ半官半民であった。その構成は頭取、頭、纏(纏持ち)、梯子(梯子持ち)、平人(鳶)、土手組(人足)であった。纏とは組を示す旗印で「持ち場を明示する必要上からも用いられたが、危険な作業の下で協力しあう火消仲間には兄弟分、親分子分の気分も生じ、團結の象徴としての纏は何にもまして重要な組のきずなとなっていた。そのため纏持ちの役は梯子持ちと並んで小頭格であったが名譽の職で、火消の職制からいえば出世コースでもあった」⁽¹³⁹⁾。消防器具は鳶口、指侯、鋸などで破壊消火を主とするものであった。龍吐水は「當

時としては驚異的なものであったらしく、寶暦元年（一七五一）に江戸の町年寄が「近頃龍吐水という火消道具が賣出されているが、消防のたれによろしいようにみえるから」と名主たちに龍吐水の使用を勧めている。名主たちはこれに對し「龍吐水は水が高く上がる道具で、消し方のためには結構なものではあるが」とその能力を認めながらも費用が足りないこと、手荒く使うと破損する心配があることなどからその返答は消極的である。⁽¹¹⁾幕府も幾度かにわたってその使用を奨励し支給しているが、龍吐水はあまり使われなかつた。龍吐水は「放水距離が十數メートルで初期消火の役には立つたにしても、延焼が始まれば消火能力はないに等しい」が「火災のもっとも近い現場で頑張る纏持ちに水をかける役割としては存在價值はあつた」。⁽¹²⁾町火消の組内でも龍吐水や玄蕃桶持ちは平人以下の擔當となつてゐることからも、その評價の低さを知ることができよう。日本での龍吐水は能力相當の扱いを受けたといえる。

技術の受容には必ず當該文化による意味づけが行われる。技術は決してそれ自體で受容されるものではない。それは各文化のコンテクストの中におかれることによりはじめて受容されるのである。技術の受容を促したのは技術にまつわる言説やパフォーマンス、イメージであつた。水竜のような實際役に立たないどころか、じゃまにさえなる機械を消防の象徴的地位にまで高めたのもこれらの言説であつた。たまたま西洋の消防が水龍の延長上に發展したため、清末にそれらが再導入された際、中國の消防は西洋と軌を同じくして發展したかのような印象を與えるが、もし西洋の消防が別の仕方で發展したとしても中國での水龍の廣まりは變わらなかつたであらう。少なくとも約二百年間、消防の世界で西洋と隔絶されていた中國で水龍による消防が發展したのは偶然でしかない。

おわりに

清代、消防の光景を一變させたのは水龍會の誕生であつた。破壊消火を中心とした官辦消防に代わつて消防の主役に躍り出た用水消火を主とする民辦消防組織、水龍會の誕生の背景には様々な要因が存在した。中でも最大の要因の一つが用

水消火の主要器具である水龍の普及である。水龍は明末、すでに中國に傳來し、杭州など一部の地域で使われたものの、消防の現場では役に立つどころか消火作業を妨げさえした。水龍はこうして一旦否定され、傳統的な破壊消火があいかわらず消防の主役であった。しかし消防の現場とは別のところで水龍に對する再評價が行われ、水龍の效能に對する信頼が人々の間で共有され始めた。一度水龍の效能に對する神話が確立されると、水龍は消防の主役となり、中には水龍に神性を見いだす所さえあった。水龍の登場は單に用水消火への轉換をもたらしただけではない。それは消防の概念、そして組織形態の變化をもたらしことになった。消防が治安維持から獨立し、「火を消す」という一點に専門化することで民間での實施が容易になった。消火の自衛手段として行われ始めた水龍會が乾隆年間以降次第に廣まっていき、清末には多くの地域で消火に従事することになる。⁽¹³⁾ 水龍會が發達し、一つの地域にいくつもの水龍會が林立するようになると、各水龍會を統轄する機構が必要となってくる。狭い地域的な消防組織である水龍會が一つの都市を單位とした消防連合體へと變貌する基礎を与えたのが消防の自治への取り込みであった。清末以降は消防の概念が再擴大し、近代的消防へと移行する過程としてとらえることができる。

註

(1) ここで言う「天災」は自然災害のことではなく、天人感應説に基づく概念である。

(2) 『清實錄』康熙一八年二月丙寅。

(3) 『上諭檔』（ハーバード大學燕京圖書館マイクロフィルム藏）光緒一四年二月一七日。

(4) 『上諭檔』光緒一四年二月二〇日。火災に對して常に天災が意識されたわけではない。乾隆四八年六月體仁閣の火災は落雷によるもので乾隆帝は「尋常の不用心による火災に比

すべきでない」と寛大な處置を取ったが（『清實錄』乾隆四八年六月乙丑）、前年一〇月の火災では領侍衛内大臣・刑部の定擬に基づき失火者を嚴重に處罰している（『清實錄』乾隆四七年一〇月丙午）。

(5) 『資治新言二集』卷一三「禁搶火示」。これは康熙九年から一二年まで江南按察使だった陳司員によって出されたものである。

(6) 『天台治略』卷八呈批「一件剖析報火事」および同書卷四

告示「一件酌賑被火窮民事」。また同書卷八「一件飭查故放事」では「火燭雖要小心、然亦由天災、非盡關人事、惟修德是以禳之」と徳を修めることで火事が防げるとする。

(7) 『西河文集』議四「杭州治火議」。

(8) 「消火」は火を消す行爲そのものを指し、技術的側面に限定する。清代には「救火」という言葉があったが、これは単に火を消すことだけでなく、消火のための組織や法制、意識などを含む概念である。そしてそれは固定したものではなく、時代につれて様々に變化した。本稿でいう「消防」とは當時の人々が「救火」という語で意識した幅廣い意味で用いる。

(9) 夫馬進「清代沿岸六省における善堂の普及情況」『富山大學人文學部紀要』七〇、一九八三。

(10) 『儒林外史』には鄰家で火災が起こった際、天に祈って風向きを變え火を消し止めた老婆の話がでている(『儒林外史』第四八回)。

(11) 『得一錄』卷四「救火章程」。また『點石齋畫報』文集「救火奇法」。

(12) 陳連生「天津早年的水會」『天津文史叢刊』第二期、一九八四。ブルドン は北京の水龍を次のように描いた。

... it [the primitive fire engine with hand pumps] could not throw a stream as far as the second story but it is surrounded by elaborate satin banners with invocations to the Fire God. That is the Chinese way—to put more faith in charms than in hoses.

(Bredon, Juliet. *Peking: A Historical and Intimate Description of its Chief Places of Interest*, Shanghai: Kelly and Walsh, 1920, p. 400.)

ブルドンは「ホース(水龍)よりもまじないに信頼を置いていた」とするが、両者が別々に意識されていたわけではない。民國の北京では水會のものが消火に當たる一方、警察官が警笛を鳴らして火の精靈を追いつたという(Gamble, Sydney. *Peking: A Social Survey*, New York: George H. Doran Company, 1921, p. 79)。

(13) 清代に限らず消防に関する專論は少ない。概説として孟正夫『中國消防簡史』(群眾出版社、一九八四)があり春秋戰國から民國に至るまでの消防を扱っている。清代にはかなりのページが割かれているが事例集の域を出ない。個別の都市の消防を扱ったものに陳連生前掲論文や秦奮力「上海消防發展簡史」『上海消防』一九八一—(孟正夫前掲書に引用、未見)などがある。天津は早くから消防が発達した都市で、吉澤誠一郎「火會と天津教案(一八七〇年)」『歷史學研究』一九九七—六のほか、陳克「十九世紀末天津民間組織與都市控制管理系統」『中國社會科學』一九八九—六や吉澤誠一郎「天津團練考」『東洋學報』七八—、一九九六のように都市構造との關連で消防に言及する論文も見られる。Dray-Novey, Alison. "Spatial Order and Police in Imperial Beijing," *The Journal of Asian Studies* 52-4 (November 1993) は北京の水會に觸れている。夫馬進「中國善會善堂史研究」(同朋舍出版、一九九六)、五五四—五五五頁が杭州の

救火義集を、同書六二六―六二八頁が上海同仁堂の擔水濟急を扱っている。また清代ではないが明末の福建については堀地明「明末福建諸都市の火災と防火行政」『東洋學報』七七―一二、一九九五がある。清代上海・天津・北京以外の消防がどうだったのか、上海・天津・北京の消防は中國全體の中でどのように位置づけられるのか、こうした問題は中國全般を見渡す枠組みの中ではじめて理解されることである。本稿はその枠組みを提供する試みである。

- (14) 民國八年序『消防彙編』では當時の消火法として用水消防法、阻絶消防法、窒塞消防法の三種を挙げる（『消防彙編』第二編、二四―三四頁）。一九三五年になる『中國消防警察』では窒息法、冷却法、破壊法、遮斷法の四つに分類している（包明芳編『中國消防警察』一九三五（孟正夫前掲書、一七〇頁より引用）。『消防彙編』がそれぞれの消火法の例として日本やアメリカの例を挙げていることが示すように、これらは日本や歐米の消防の實態に基づいた分類法であり、これをそのまま清代中國の消防に適用することはできない。

- (15) 『點石齋畫報』亥集「火災待賑」、同書文集「救火奇法」。
(16) 清代においても兩者の違いは認識されていた。例えば『杭州善堂文稿』（浙江圖書館藏）「仁錢二縣奉飭議修火政案稿」光緒二五年六月二九日、鹽運使世杰の照會文には「杭省救火器具雖尙足用、惟救火拆屋之具殊覺不多」とあり、「救火器具」と「救火拆屋之具」を區別している。

- (17) 魚谷増男『消防の歴史四百年』（全國加除法令出版社、一九六五）、六三頁に江戸では「正保・慶安ころには、五人組

や近所の人々が駆けつけて消火に當たる「五人組消防」「驅附火消」ともいうべきもの」があったという。この「驅附火消」にならって「駆けつけ消防」と名付けた。

- (18) 『上諭檔』嘉慶二十四年一〇月二日李海元、方在功、王輻確供。

- (19) 清末の駆けつけ消防の實態については『點石齋畫報』庚集「不愧節烈」、同書丁集「花間縱火」などを参照。なお駆けつけ消防においても破壊消火が行われることがあった（『點石齋畫報』辰集「留鬚惹禍」）。

- (20) 『清實錄』雍正六年九月辛酉。

- (21) 『資治新言二集』卷一三「禁搶火示」。

- (22) 四川省檔案館編『清代巴縣檔案匯編（乾隆卷）』（檔案出版社、一九九一）、三三〇頁。

- (23) 孟正夫前掲書、一五三頁。

- (24) 雲陽縣では知縣葉慶椿が主導して平安局を設立したが、その際まず居民に屋根を茅葺きから瓦葺きに易えるように勧めている（民國『雲陽縣志』卷二〇惠恤）。

- (25) 『治浙成規』卷五臬政「杭城救火搶火等各事宜」、光緒『杭州府志』卷七三郵政。

- (26) 『治浙成規』卷六臬政「杭城失火分別查參動項賑卹」。

- (27) 以下の記載はすべて『杭州善堂文稿』。「仁錢二縣奉飭議修火政案原」による。この史料の性格、及び杭州の善學組織については夫馬進前掲書第九章を参照。この照會文は、被災後、再建に當たって一〇家毎に風火公牆を建てることを提案している。清代、地方政府がこのように火災対策として都市

計畫に介入した例は少ない。この例でも恐らく實施はされなかったであろう。一方非行政都市の漢口ではギルドが火路用の土地を寄付した (Rowe, William T. *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1769-1889*, Stanford, California: Stanford University Press, 1984, pp. 318-319, 333)。

- (28) 『點石齋畫報』利集「水門被燒」は湧金門の火災で官民が協力して消火に成功した例である。

- (29) 杭州では宣統二年三月に省城拆屋攤貼章程が定められている (光緒『杭州府志』(民國五年陸懋勳續纂) 卷一七六巡警)。

- (30) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「救火器具製備鐵鉤鐵斧鐵鎚火鉤」。

- (31) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「酌議救火條規」。

- (32) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「救火器具置備交代兵役各分執事以需責成等條」。

- (33) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「同城添設救火器具移營飭縣遵辦」。

- (34) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「救火事宜各條規」。

- (35) 嘉慶『湖南通志』卷三五戶口二。

- (36) 中國第一歷史檔案館『清宮消防火班章程』『歷史檔案』一九九〇—四。

- (37) 『總管內務府現行則例』堂上卷一「添設防範火燭班房人員」。

- (38) 『上諭檔』乾隆六十二年(嘉慶二年)一〇月二二日。この上

諭では康熙一八年一二月の上諭と同じロジックが援用されている。

- (39) 『總管內務府現行則例』堂上卷一「添設防範火燭班房人員」。

- (40) 『清實錄』嘉慶一九年五月戊申、「總管內務府現行則例」堂上卷一「添設防範火燭班房人員」。

- (41) 『上諭檔』嘉慶二四年一〇月二〇日。

- (42) 『上諭檔』嘉慶二四年一〇月二二日。

- (43) 『上諭檔』嘉慶二四年一〇月二二日。

- (44) 『總管內務府現行則例』堂上卷一「添設防範火燭班房人員」。

- (45) 『上諭檔』光緒一四年一二月一七日。

- (46) 『上諭檔』光緒一四年一二月一七日。

- (47) 『上諭檔』光緒一四年一二月一七日。

- (48) 『上諭檔』光緒一四年一二月一七日。

- (49) 『上諭檔』光緒一四年一二月二二日。

- (50) 『上諭檔』光緒一五年正月二九日。

- (51) 『宮中檔雍正朝奏摺』二七四頁、雍正五年一二月一日黃廷桂奏。

- (52) 『清實錄』雍正六年九月辛酉。

- (53) 『清實錄』同治六年一二月丙子、同治八年六月辛酉、同治九年正月癸未、戊子、壬辰。

- (54) 陳連生前掲論文。

- (55) 民國『寶山縣續志』卷一〇消防。

- (56) 民國『通縣志要』卷三建置「局廠」。なお以上二例はいず

れも民國の例であり、これらが清代にまで遡るかは定かではない。

- (57) 民國『烏青鎮志』卷二三任卹の「里仁坊水龍」、民國『鎮海縣志』卷一二善學の「葉氏水龍局」、民國『嘉定縣續志』卷二會所の「鑿業洋龍」など。

- (58) 嘉定縣の貽福堂洋龍は城隍廟會首が龍員(會の運營者)になった(民國『嘉定縣續志』卷二會所)。後述の常州もそうであるが、祭りと消防の關わりを示す興味深い一例である。

- (59) たとえば合川縣では本匠、泥水、轎夫が(民國『合川縣志』卷二九公善)、嘉定縣の布業洋龍は「本業各友工」が龍夫となった(民國『嘉定縣續志』卷二會所)。

- (60) 唯一の例外は宋代延平府の「潛火義社」である(『八閩通志』卷六一潛火義社)。

- (61) 陳連生前掲論文。

- (62) 道光『武進陽湖縣合志』卷五營建。

- (63) 『亦有生齋續集』卷一「左廂捐置水龍碑記」。

- (64) 民國『嘉定縣續志』卷二會所、江蘇省武進縣縣志編集委員會編『武進縣志』(上海人民出版社、一九八八)、六二四頁。

- (65) 佐々木衛編『近代中國の社會と民衆文化』(東方書店、一九九二)、二二六頁。

- (66) 『上海救火聯合會報告』姚福同序、後世周官之制廢、在上者鮮衛民之政。於是不得不起而自衛。明清以來、通都大邑里衛各鳩義社、以捍火患。此救火會所由來也。

- (67) 消防組織が自衛から發展したという圖式は歐米諸國にも當

てはまる。イギリスでは地主や工場經營者の所有する私設消防隊が地域の火災にも對應した(Hall of Flame. *Guide to Exhibits*, p. 2. <Hall of Flame 消防博物館の展示品解説冊子>)。オーストラリアでも消防は自助組織(self-helping organizations)として發展した。

- (68) 道光『武進陽湖縣合志』卷五營建、光緒『武進陽湖縣志』卷三營建、『武陽志餘』卷三善堂公所。『武陽縣志』と『武陽志餘』は九年の違ひしかないが、兩者に記録された水龍の分布狀況を比較すると大きな違ひがある。ただ『武陽志餘』の編纂意圖が『武陽縣志』の簡略や不足を補うことにあったことから(『武陽志餘』序)、兩者の違ひは九年の歲月がもたらした變化ではないことは明らかである。ここでは兩者を併せたものを清末の狀況として扱うことにする。

- (69) 『亦有生齋續集』卷一「左廂捐置水龍碑記」。

- (70) 水龍會は都市が傳播の基點となり、水陸交通路に沿って展開した。水龍會のない中小都市が多い中で、大都市蘇州の近郊にある太湖廳では鎮以下の村々まで水龍會が普及していた(本文後述)。

- (71) 道光十一年『上海同仁堂徵信錄』(上海博物館藏)「擔水濟急條約」。

- (72) 『得一錄』卷四「救火章程」。

- (73) 民國『合川縣志』卷二九公善。

- (74) 『點石齋畫報』木集「賽燈盛會」。

- (75) 乾隆年間の例としてはこのほか南京の五城水龍局がある(光緒『續纂江寧府志』卷一四一九上人物)。また乾隆一

年に蘇州で（乾隆『蘇州府志』卷八〇雜記三）、乾隆二六年に鎮江で（光緒『丹徒縣志』卷三六尙義）、乾隆五九年に揚州で（『浪跡叢談』卷二「水倉」）水龍が設置されている。

(76) 光緒『漢陽縣志』卷二營建略義舉。

(77) 洞庭東山志編纂委員會編『洞庭東山志』（上海人民出版社、一九九二）、一七二頁。

(78) 『吳縣洞庭山魚鱗冊』（國立國會圖書館藏）二八都一、九一〇圖、二九都四圖に見える。「水龍會」という登記名からその場に水龍會があったとするのは即断にすぎよう。ただ「水龍基」という表現はその場に水龍があったことを示すと思われる。

(79) 公安縣志編纂委員會編『公安縣志』（漢語大詞典出版社、一九九〇）、四一五頁、「古代至民國時期、本縣縣鎮及農村集鎮、派人打更巡夜、提醒防火防盜。有太平缸等消防設施」。また『儒林外史』第二六回「鄉間失火、又不知救法、水次又遠。足足燒了半夜、方才漸漸熄了」。

(80) 官民の區別は本節で述べるようにはっきりしたものではない。ここでの區別は便宜的なもので両者が截然と分かれたることを意味するものではない。民辦消防が盛んとなってからも官辦消防は行われていたし、官辦消防でも用水消火を採用するようになったことからこの圖式自体も明瞭なものではない。くおおよその傾向を示すものではない。

(81) 嘉慶『湖南通志』卷三五戶口二。

(82) 夫馬進前掲書六二六—六二七頁。

(83) 破壊消火に固執した清末杭州の地方官は、『左傳』のこの

説をあげた上で、宋は今の河南歸德府にあり、當地の家屋は屋根が平べったくて土で覆われているので大屋は破壊しにくいから土を塗り込めたが、今の浙江省の家屋はみな瓦で覆われており土で塗り込めることはできないと言い、破壊消火の根據を「徹小屋」に求めている（『杭州善堂文稿』『仁錢二縣奉飭議修火政案稿』）。

(84) 『新增都門紀略』『都門雜詠・時尙門』。

(85) 民國『巴縣志』卷一五消防。咸豐七年設立の「萬邑救火局」も官が深く關與した一例である（『萬邑公會紀略』卷六「萬邑救火局」）。

(86) 『消防匯編』第三編、一一—一四頁。

(87) 『內政年鑑』警政編、五三〇—五七四頁。

(88) 民國『寶山縣續志』卷一〇消防。

(89) 民國『上海縣續志』卷二。イギリスやアメリカの消防の發達に保險會社が大きく貢獻したのはよく知られている。清末の上海には數多くの火災保險會社（水火保險行）が存在していた。租界の救火章程では火災現場に入れたのは救火會の者と保險行の代表者が一人づつ、それに工部局の許可をもらった者だけで中國人は一切入ることができなかった。租界では兩者は何らかの關係があったかも知れないが、『消防匯編』の序文に「吾國則水道非地方自辦、保險事業亦復雜糅、與消防渺不相涉」とあるように中國全般でいうと保險會社は消防の發展に寄與するところがなかった。

(90) 『上海小志』「租界救火會」。

(91) 民國『江灣里志』卷九警務志消防。

- (92) 『且頑老人七十歳自叙』光緒一〇年。ゆらに詳しく記述が『上海救火聯合會報告』李鍾珏序に見える。
- (93) 例えば同治『上海縣志』卷八物産は『滬城備考』卷二「水龍」を引いて説明している。また Elvin, Mark, "Skills and Resources in Late Traditional China," in Perkins, Dwight, ed., *China's Modern Economy in Historical Perspective*, Stanford, California: Stanford University Press, 1975, p. 99 参照。
- (94) 山本純美『江戸の火事と火消』（河出書房新社、一九九三）一一二頁。
- (95) 魚谷増男前掲書、一一〇—一二二頁。
- (96) 大藏永常『農具便利論』下。この書は文政五年（一八二二）になるものだが、ここに載る龍吐水はオランダ傳來であったことからホース付きのものである。しかし、後には何故かこのタイプの龍吐水は使われず、専ら hand tub 式のものを用いられた。
- (97) 魚谷増男前掲書、一二二頁。
- (98) 『滬城備考』卷二「水龍」では「今水龍之法、縣橋南唐某、自國初得之倭人、久而他處漸傳」とある。また『冷廬雜識』卷六「水龍」には「得水龍之制於倭人」とあり、現物を得たのではなく單に製造法を學んだとする。民國になる『上海小志』の「至清順治年間、唐氏得水龍于日本」というのは誤解であろう。また「倭人」が必ずしも日本人を指すとは限らない。
- (99) 魚谷増男前掲書、一二三—一二八頁。
- (100) Hall of Flame, *op. cit.*, p. 4.
- (101) 『西齋集』（孟正夫前掲書、一七〇頁より引用）。
- (102) 乾隆『蘇州府志』卷八〇雜記三。
- (103) 『宮中檔雍正朝奏摺』八八—八九頁、雍正十一年二月一日孫詔奏。官主導の水龍設置は常州の例を見てもわかるとおり、一過性のもので根付かなかったが、水龍の普及に影響を与えたと思われる。
- (104) 『亦有生齋續集』卷一「左廂捐置水龍碑記」。
- (105) 光緒『重修天津府志』卷七郵政。
- (106) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「酌議救火條規」。
- (107) 『清詩鐸』卷一五火災。
- (108) 『浪跡叢談』卷二「水倉」。
- (109) 北方での水龍の普及が遅れた原因の一つに水の便の悪さがある。特に火災の多い冬期には水が凍っていることが多かった。
- (110) 民國『青浦縣續志』卷三建置にあるようにメンテナンスを怠ると城中にあった木龍（水龍）が「以年久失修、不堪應用」ということになる。なお新たな道具（技術）が及ぼす影響としてアメリカにおける蒸気ポンプの導入の例を挙げてみよう。アメリカでは一八六〇年代に入って蒸気ポンプが出回るようになった。蒸気ポンプは腕用ポンプの数倍の放水力があり、しかもわずか二、三人で操作することができた。市政府は蒸気ポンプを購入すると多数のボランティアを解散させて専門の消防士を雇った。アメリカでは蒸気ポンプの導入は消防の専門化を促したのである（Hall of Flame, *op. cit.*, p.

9)。

- (111) 胡祥翰『上海小志』消防、民國『上海縣續志』卷一風俗附錄時。租界では西洋人による「水龍會」が行われた。日は不定で母國から大員が来たときや嘉慶の際に行われた。一説ではアメリカのグラント大統領（一八六九—一八七七任）を迎える際に始まったという（『點石齋畫報』癸集「寓滬英人望祝英君主陞位五十載慶典第四圖」）。ちなみにアメリカでは毎夏消防ポンプが町の中心地（高い尖塔のある教會が選ばれた）に集い、放水力を競う。この行事は「muster」と呼ばれ、すでに一八〇〇年代初期から競争としての性格を帯びていた。musterは住民の教化や士氣の高揚といった作用を果たした。また消防隊のイメージを向上させるのに役立ち、パレード専用の華やかなホース運搬車が作られた（Tuffs, Edward R. *Hunneman's Amazing Fire Engines*, New Albany: Fire Buff House Publishers, 1995, p. 43, and Hall of Flame, *op. cit.*, p. 10）。なお水龍會が水龍演習の意味で用いられるときには「水龍會」と表記する。

(112) 同治『南潯縣志』卷二三風俗。

(113) 光緒『平望志』（『中國地方志民族資料匯編（華東卷）』（書目文獻出版社、一九九二）、四四四頁）、光緒『菱湖鎮志』卷一〇風俗。

(114) 陳果夫『蘇政回憶』（正中書局、一九五一）、三三三頁。民國五年五月二六日に上海救火聯合會は各地の操演が分龍節の五月二〇日に行われるため互いの救火會同志の操演を参照することができないことから日をずらすと提案している（『上

海救火聯合會報告』公牘乙編「操演事業」）。

(115) 民國『黃渡鎮志』卷二風俗。

(116) 佐々木衛編前掲書、三二五—三二六頁。

(117) 民國『烏青鎮志』卷一九風俗。

(118) 光緒『平望志』（『中國地方志民俗資料匯編（華東卷）』（書目文獻出版社、一九九二）、四四四頁）。

(119) 實際、光緒年間の天津では春秋二回に捐金を集めて演劇を上演し赤帝眞君（火神）を祀り、宴席を設けて伍善（消防活動に當たる人員、「武善」ともいう）の勞をねぎらったという（『津門雜記』卷上水會）。

(120) 分龍節は主に江南で行われる節日である。この日は天界の小龍が老龍と分かれて自らの管轄地域へ向かうことになっており、小龍は分かれるのに忍びず涙するため雨が多いといわれている。早く宋代に分龍日の記録が見られる（『避暑錄話』下）。

(121) 『遠西奇器圖說』卷二「水統圖說」。

(122) 『西河文集』議四「杭州治火議」。

(123) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「酌議救火條規」。

(124) 『湖南省例成案』刑律雜犯卷一三失火「救火器具置備交代兵役各分執事以崇責成等條」。

(125) 『西齋集』（孟正夫前掲書、一七〇頁より引用）。

(126) 乾隆『蘇州府志』卷八〇雜記三、

水龍。蘇州程封君肇泰始倣西法爲之。……初成、會城西昇平里火。封君自率僕從、賁水龍、救熄之。由是蘇人競傳其制。乾隆十一年知府傅椿令城內外每圖必製一具、以

備倉猝、甚爲民利。

あるいはすでにこの記事自體が神話化していたかもしれない。當記事が記載されているのは乾隆一三年の『蘇州府志』、つまり乾隆一一年に知府傅椿が城内外の各圖に水龍を一臺ずつ備えるよう命じたすぐあとである。『吳門表隱』では陳「一程」肇泰の話は康熙初であるとする。そうすると、『蘇州府志』ではあたかも兩者が連續して起こったかのように書かれているが、この二つの出來事の間に八〇年ほどの時差があることになる。

- (127) 本章では水龍普及の要因を言説の變化に求めたが、他の要因を考えることはできないだろうか。たとえば水龍の手に入れやすさ (availability) の變化も重要な要因となったはずである。初期においては王徵や程肇泰のように自作することが多かったようだが清代中期以降になると水龍を購入するケースが多くなる。南京では同治四年に上海製造局製の水龍一臺を購入 (光緒『江寧府志』卷一四—九上人物)、巴縣では光緒二二年に廣東製水龍四臺を購入しており (民國『巴縣志』卷一五消防)、廣域にまたがる取引が行われていたことを知ることができる。しかし残念ながら水龍がどこでどれだけどのように作られたかを知る手がかりはない。

- (128) 光緒『甬里志稿』公署。

- (129) 『滬城備考』卷二「水龍」。

- (130) 『點石齋畫報』文集「火在水上」。

- (131) 『點石齋畫報』亥集「火災待賑」。

- (132) 吳友如『風俗志圖說』下七「水龍被焚」。

- (133) すくなくとも一八五五年に香港、一八六四年に上海へ送られた Hunneman 社製ポンプはそうであった。しかし「救火聯合會報告」に載せる「上海二十五年前之救火器具」は洋龍としながらも明らかに hand pump 式の水龍であるし、『點石齋畫報』で「何々洋龍」と描かれるものもそうである。洋龍はある特定のタイプのポンプを指す名稱ではなかったが、「水龍」と對照して用いられている場合は少なくとも在來のポンプより高性能のポンプを意味した。

- (134) 『中國消防辭典』(遼寧人民出版社、一九九二)、六二八頁。

- (135) 民國『嘉定縣續志』卷二會所。光緒二年重修『滬游雜記』「洋水龍」には「邇來各洋行及全亭悅生產百貨店所售中小水龍、僅需三五人、即能救急濟事」とあり、小型で高性能の洋龍も出回っていた。なお先述の W. C. Hunneman & Co. の出荷リストによると一八四五年一月三日と Canton Merchants Association に四臺のポンプが賣られ、一八五五年八月六日には「Inkerman」という名のポンプが香港に、一八四六年に Leominster に賣られたポンプ「Torrent No. 1」が同社に下取りされて一八六三年一月三日に上海の Augustine Heard & Co. に賣却された (Tufis, *op. cit.*, pp. 93, 96, 116)。この「Torrent」はマクファランの上海の記事の中で確認するところだが Macfarlane, W. *Sketches in the Foreign Settlements and Native City of Shanghai*, reprinted from the "Shanghai Mercury," Shanghai, 1881, p. 37)。

(136) 民國『黃渡續志』卷一火政。

(137) 『上海小志』『南市救火會』、『杭州善堂文稿』『仁錢二縣

奉飭議修火政文稿』七月二日善堂紳士から鹽運使への呈文でも官の水龍は龍身が大きいのに性能が悪く、火事の現場で道をふさいでしまうので、小型の水龍を使うよう求めている。

(138) 梁遇春『淚與笑』『救火夫』。

(139) 山本純美前掲書、一一九頁。

(140) 魚谷増男前掲書、一二一—一二三頁。

(141) 山本純美前掲書、一二三頁。

(142) 山本純美前掲書、一二二頁。

(143) 消防と軍隊、とりわけ團練との関係は本稿で扱うことができないかった。水龍會が廣まったのはキューンの言う“local militarization”が進行したのと同じ時期である (Kuhn,

Philip A. *Rebellion and its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure, 1796—1864*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1970)。
水龍會の誕生・普及が清代の社會の大きな流れとどのように關わるのか、今後の課題としたい。

〔附記〕 本稿は文部省科學研究費補助金（特別研究員奨励金）による研究成果の一部である。

THE BIRTH OF FIRE BRIGADES (水龍會) IN QING CHINA

TAKASHIMA Ko

Until the late-eighteenth century, the extinction of fires was accomplished primarily through the destruction of nearby buildings in order to cut off the path of the fire. Fire-fighting 消防 was not regarded as a specific and independent activity; it was rather closely associated with other public security measures. Only a few local officials organized fire brigades which consisted of soldiers and militiamen. The introduction and prevalent adoption of the hand tub-type fire engine 水龍 changed this situation. This type of fire engine was introduced to China at the end of the Ming period, and was in use in a few cities such as Hangzhou. Due to its size, however, this type of fire engine created disturbances and as a result it temporarily disappeared from the scene. It was only reintroduced in the eighteenth century. Public demonstrations of the workings of this fire engine were held to convince the public of its usefulness. Once the public's faith had been secured, this fire engine re-emerged as an indispensable apparatus for fire-fighting. The adoption of this type of fire engine made it possible for commoners to fight fires themselves. From the period of the late-eighteenth century on, an increasing number of fire brigades were established. By the period of the late Qing, it became necessary to regulate fire brigades. Through the amalgamation of private fire brigades within cities, and as a result of foreign influence, fire-fighting became tied to local self-government. The development of this concept linked fire-fighting to issues of urban planning and infrastructure development, which in turn further extended the concept and operations of fire-fighting.